

言葉によって成った」に他ならない。この絶対的真理に対し、四節以下で相対的真理が説かれるが、それは言葉が某年某時にイエスにおいて肉となった、ということであり、イエス以降、神と合一することを生き生きと洞察する者においては、言葉がイエス・キリストの場合と同じように受肉する、というものである。これは浄福への道としてフィヒテによって示された宗教の立場に他ならず、暗闇の中を生きる「死んでいる人間」が現世において永遠の生命に与れるということである。

この分析に対し、シェリングの分析は言葉（ロゴス）解釈において全く異なる。シェリングは積極的哲学の出発点である神の最も純粋な現実態から論を起し、神が神の中に神の意志とは無関係に生じた「神とは異なる存在の可能性」をどのようにして現実化するか、つまり世界創造を行うか、という積極的哲学の立脚点からヨハネ福音書を解釈をする。そしてヨハネ福音書冒頭部分に同語反復ではなく、進展するものを見るシェリングは、ロゴスを時機ごとに規定し、デミウルゴスの作用をするものとする。ここにフィヒテとの大きな違いが出る。またロゴスが生命を持ち、光であったことをめぐっても、両者の解釈に違いが生じる。フィヒテは、光の意味についての認識ができない暗闇を、精神的に低い段階にある人間、死んでいる者とするのに対し、シェリングは暗闇を異教と捉える。しかも異教自身が把握しえなかった光の意味を「キリストの先在 *Präexistenz*」と解釈し、その光が纏っていた神の姿を捨て、光が人間の姿で現象することを受肉と考える。つまり、光として先在するキリストが受肉することにより、キリストがキリストとし

て受け入れられることになる。ユダヤ教をも含めあらゆる異教を前提にしてキリスト教を考えるシェリングの宗教観が、イエス・キリストに関してもフィヒテの解釈との違いを生み出す。このようなロゴスを受け入れた者は「神の子の資格」を与えられ、この世が終わるときに、神の子となることが出来る。フィヒテの場合、人はこの世において浄福に、すなわち、自らを無にすることにより神の意志が私たちの中に生じ、浄福に与ることが出来るが、シェリングの場合はこの世が終わるとき初めて救いに与れると考え、両者は救いの時期においても大きく異なる。

このように、『ヨハネによる福音書』の同じ部分を解釈するにしても、フィヒテとシェリング両者の哲学は、解釈に極めて大きな違いを生み出し、救済の時期に関しても現世と来世のように対照的なものになっている。

キルケゴール思想における 罪の不可避性について

行 武 宏 明

キルケゴール思想において罪概念は、信仰概念の対概念として、重要な意義をもつ概念である。この罪概念を、キルケゴール思想におけるキリスト教独自の特徴とされる「超越性」を考慮に入れた上で規定すると、「人間の自力では対処、対応することが不可能な致命的過失」となる。

第3部会

『死にいたる病』において、キルケゴールは、罪が「何故」生起するのかを問題とするのではなく、「如何に」生起するのかについて考察する。本発表はキルケゴールによる上記の考察に基づいて罪の本質を明らかにし、その解決の端緒へと考察を進める試みである。

キルケゴールによれば、罪の本質は「絶望」である。絶望とは人間内部（「自己」）における不均衡である、より詳細に言うと、人間の恣意的我執が内面において直面する、自身を措定する「他性」を拒絶することである。この人間内部における絶望的葛藤を解決するためには、人間が恣意的我執を中断し、自身を措定する他性にたいして謙虚、誠実に振る舞い、他性が付与する固有の自己自身を受け入れることが必要である。しかし、恣意的我執に囚われた人間は自身を措定する他性を拒絶し続け、より絶望を深化、激化していく以外にない。

本発表は、キルケゴールが描出する絶望深化、激化の展開から、絶望の基礎に存在する人間の諸傾向を看取する。それは、保身、孤立、嘘である。これら諸傾向は有機的にひとつの傾向を形成し、絶望を深化、激化させていくと考えられる。自身の生に調和に基づく安定、安心を与えとみなされる整合されたひとつの全体を守る傾向。反省の進展によって発見される自身の内面性を直接的、自然的人間から隠し、独りで居続けようとする傾向。その自身の内面性の孤独をより効果的に果たすために、ひとつのペルソナを演じることによって他人を欺き、内面と外面を完全に切り離してしまおうとする傾向。これら諸傾向をもつ人間にとって、自身を措定する「他性」は、自身の安定

を動揺させるもの、孤独への欲求を妨げるもの、構築したペルソナを無に帰してしまふものとして積極的に拒絶、排除されるべきものと映る以外にない。そして、その拒絶、排除の試みこそが人間の絶望を深化、激化させるものである。つまり、絶望の基礎に存在するかの諸傾向は、人間を絶望に定め、より深く激しい絶望へと促すもの、すなわち絶望の本質である。

以上から帰結することとして言うことは、人間は自身のもつ保身、孤立、嘘の諸傾向から自由になることがない限り、罪、すなわち人間の自力では対処、対応することが不可能な致命的過失を犯さざるをえないことである。

では、果たして保身、孤立、嘘の諸傾向から自由になることができる人間は存在するだろうか。本発表はその可能性を否定する。すべての人間は保身、孤立、嘘の諸傾向をもち、そしてそれら諸傾向に促されて、人間の自力では対処、対応することが不可能な致命的過失を犯さざるをえない存在である。そして、上記の如き根本的弱さをもつとみなされる人間存在において、もしも「救い」というものが成立しうるのならば、それは、その根本的弱さの認識を前提とした上での、無限性、永遠性を基礎とする、一個の独立した人間同士の非合理的あるいは超合理的交流以外には存在しない、と考えられる。

「精神」の意義が見失われ、それ故に存在の空虚さ、無意味さに直面せざるをえない我々にとって、上記の意味での人間関係を構築することは非常に重要なことだと、本発表者は考えている。それ故に、この人間関係についてより考察を深めることが今後の課題である。